

お疲れさま

新任教職員のみなさん

新しく教職員になられた みなさん

お疲れさまでした。一学期はいかがでしたか。

多忙さと思いがけない現実に不安と緊張の

日々だったと思います。

子どもたちの成長や何気ない一言、職場の仲

間の気配りや励ましに支えられたこともあつ

たのでは。

まずは、ゆっくりと身体を休ませて下さい。

そしてこの特集をお読み下さい。

2学期からの元気と勇気を育んでくれること

を願っています。



(写真と本文は関係ありません)

教職に就いた仲間たちへ

北本市立南小学校 林 聡一郎

先輩に励まされて

私が採用されたのは17年前。現場ではわからない事ばかり。二十代はただ一人という職場で、周りはベテランばかり。先輩の実践を拝見する度、自分の力のなさにウンザリ。

そんな中、先輩からの一言でホッとしました。

「先生たちは教えることが仕事。わからないことは同僚に尋ねなさい。みんな丁寧に教えてくれるよ。」

先輩たちから、たくさんのことを教えていただきました。授業の進め方、連絡帳の書き方、家庭訪問の留意点などなど。先輩たちから教わったことが自分の実践の基礎になっています。

学びの場を求めて

もっとよい実践をしたい。この思いに応えてくれたのが組合の学習会でした。

国語の学習会では、作文指導や物語文・説明文の授業づくりについて教えていただきました。講師は当時同じ学校に勤務していた先輩で、日本作文の会でも活躍されていた草野先生。

ある日「授業する前に教材を何回読んでいますか。子どもたちに教えるのだから、自分で20回位読んでからどんな授業をするか考えるのです。」と、おっしゃいました。その頃、私は指導書ばかり気にして、教材を深く読み取っていませんでした。草野先生にそれを見透かされたようで、自分自身を恥ずかしく思いました。また、大先輩の授業に対する真摯な姿勢に、感銘を受けました。

特別支援についての学習会では、個にあわせた指導・支援の方法を丁寧に教えていただきました。講師は、養護学校（今の特別支援学校）の教師や群馬大学の講師などをされていた宮崎先生。

全体指導をしていると見失いがちな一

人一人に寄り添うことについて、具体的な事例を挙げてお話してくださり、教師にとって「大切なことは何か」を考えるきっかけを作ってくださいました。

共に学べる仲間を

今、北本市教職員組合では、北本こくご・さんすうの会と共催で学習会をしています。

国語は文芸研事務局長の上西先生が講師です。毎回、参加者のレポートをもとに進めています。その中で、物語文や説明文の文芸的価値に目を向け、授業づくりについて学んでいます。

算数は大東文化大の渡辺恵津子先生が講師です。こちらにもレポートをもとに進めています。教材・教具を工夫した、子どもたちが主体的に考える授業づくりについて学んでいます。

場当たりの指導をしていたら、子どもに見透かされます。よりよい実践をするためには、教師自身が学び続けていく必要があります。そのためには仲間が必要で、ぜひ、学年・学校の教員集団や学習会などのすてきな場と、そこに集うすてきな仲間を見つけてください。

「苦悩」から「成長」へ

埼玉県立蕨高校 逸見 峻介

教員一年目は、「苦悩」の一年であった。社会人一年生となり、ほとんどのことが今までと変わった。日々の仕事、日々の行動に責任が伴う。現場は綺麗事ばかりではなく、日々葛藤に溢れていた。社会人一年目の私は、まだまだ教員の厳しさを理解できてはいなかった。

教員となり、日々授業や部活に追われた。先の見通しが持てず、日々自転車操業で様々なことに対処するしかできなかった。授業では授業開始五分前に準備が終わり、不十分な状態で教壇に立つこともあった。部活では今までの顧問と代わり、新しく私が顧問となった。顧問となって教員としてふるまう必要に駆られ、生徒に厳しく接した。日々の行動や自分を追い込むために必要なことを説いた。

しかし、結局空回りの連続であった。生徒に関わろうとすればするほど「厳しくしなくては」という焦りが生まれて

しまった。その焦りは生徒にも伝わり、うまくいかなくて悩んでいた生徒もいた。それをなんとかしようとして努力したが、結局は空回りをしてしまった。

そんな一年目の大きな支えとなったのは、先輩の教員の方々だった。何かあると心配をしてくれ、気にかけて、励ましてくれ。部活で辛い時も先輩方は「焦ってはダメ。今できることをしっかりとやりなさい。」「私だつてうまくいったことはない。最後まできつとうまくいくことはない。最後まできつとうまくいくことはない。」「と声をかけてもらった。そんな支えがあったからこそ、生徒に力いっぱいぶつかることができたと思う。先輩方の支えがなかったら、ぶつかることすらできずに、逃げていたかもしれない。だからこそ最後には、生徒に少しでも何か伝わったことがあったと感ずることができた。

支えられているからこそ、「苦悩」が「成長」へとつながる。自分が思い描い

ていた教員としての順風満帆なサクセスストーリーとは違うが、日々「支えられていること」を感じる。そうやって、教員二年目を過ごしている。きつと今年もうまくいかないだろうが、しっかりと苦悩することを楽しんでいきたい。支えてもらえていることへの感謝の気持ちを忘れず、その力を生徒へ周りへと還元していく。今までも、そしてこれからも。

失敗を恐れずそこから学ぶ、

楽しくなければ授業じゃない

三郷特別支援学校 小俣 等

ベテランと言っても、一つ一つの実践を夢中でやっているうちに30年が経ち、もうそんな年になったかなと思うのが実感です。バリバリの体育会系教員として障害児学校に配属になり、初めは失敗ばかりの毎日でした。恥ずかし話ですが、

知的障害を持った子に接するのが教師になって初めてで、後ろから急に背負いかかってきた子を反射的に投げ飛ばしそうになってしまったこともありました。当時の障害児教育の実践は手探りの部分が多く先輩の教師に「今日はどんな授業をしましょうか」と聞くと「そうだなー、今日も散歩にでも行くか」そんなところからのスタートでした。当時の先輩が言っていた言葉で今でも心に残っているのが、「楽しくなければ授業じゃない。」という言葉です。少し乱暴な言い方かもしれませんが、私はこのことを今でも大

切にして授業を組み立てています。もちろん子どもにとってもそうですが、自分にとってもワクワクするような心躍る実践、たとえ失敗してもそこからまた学べばいいやと思って実践するようにしています。

子どもの内面、気持ちがわかるようになりたい。

知的障害が重かったり、自閉的な傾向の子どもたちを理解することは本当に大変だし難しいことです。でもなんとかしてその子の心の声を聞いてあげたい、その子の立場に立って理解してあげたいと思ってやってきました。「いつも一番大変そうな子どもの担当にあえてなる。」そう心がけてきました。そんな中で失敗もあります、子どもと「心が通じない」と実感できる瞬間はどんなに辛いこ

とがあっても最高の幸せを感じる一瞬です。若い人達にも是非この瞬間を味わってもらいたいなあと思います。今職場は本当に忙しくて、子どもの話を話す暇なんてない状況です。でも、子どもの事を意識的に話すようにすると思います。自分が子どものことを話していると自然と誰かが話に乗って来てくれるはずです。どんなに忙しくても教員ですからほっとくわけがないのです。子どもの話は職員室を明るくします、どんなに忙しくてもホットできる瞬間を作ってくれるはずです。そして、できれば実践や事例はレポートにして多くの先生からアドバイスをもらおうと思います。私自身これからも、まだまだ若者に負けないように走り続けていきたいと思っています。

一緒に学んでいきましょう

入間市立向原中学校養護教諭 廣瀬 ひとみ

夢と希望に燃えて4月に学校に赴任された初任者の皆さんは、今現在、現場の忙しさに驚いていることと思います。私も若千二十歳で生徒数800名ほどの中学校に赴任した新任の頃、毎日何をしていたんだろうと思いつけないほど無我夢中の日々だったように思います。短大を卒業してそれほど日にもたつていないのに、先生と呼ばれる立場になり、緊張と戸惑いの連続でした。その上、目の前にいる中学3年生は自分の弟と同じ学年で、先生と生徒というより、兄弟姉妹のような感じでした。狭い保健室はいつも具合の悪い生徒や、けがをした生徒でいっぱい、一人で対応するのはとても大変でした。健康診断や、スポーツ振興センター（当時は日本体育、健康センター）の事務処理、学校保健委員会の開催などわからないことばかりで、短大で学んだことと現場のギャップを感じながら、日々仕事をする中で覚えていったよ

うに思います。当然ぶつかる壁も多く、これでいいのかと悩んだり、自信を失ったりの繰り返しでした。そんなときに、市内の養護教諭の仲間にサークル活動や学習会に誘われ、一緒に勉強する機会を得ました。保健指導や、子どもたちへの関わり方など、日々の仕事に直接関係してくる実践報告は、自分のこととして受け止めることが出来て、大きな収穫でした。なにより、自分の意見が自由に言える雰囲気はとても安心感があり、頑張ろうという気持ちになりました。

以前勤めていた学校が荒れて、保健室に來る生徒の対応が職員に理解されず、保健室閉鎖に追い込まれたことがあります。それまでの自分の仕事を否定された気がして、悔しさでいっぱいでした。悲嘆に暮れた毎日を送っていた時も救ってくれたのは学習会でした。すぎる思いで多くの学習会に駆けつけ、話を聞き、自分の気持ちを語る中で、同じような経

験をした人達からの励ましは、どんなに心強かったかしれません。その後転任した学校でそれまでやってきたように生徒と対応をし、職員との連携も問題なく、また学校の中で保健室の役割が理解されたことを確認できた時、自分のやり方は間違っていないかと自信を取り戻すことが出来ました。あの苦しかったとき、学習会に行かなかつたらどうなっていただろうと思うことがあります。

初任の先生方は、これから多くの困難に遭遇することもあるでしょう。そんなとき、一人で悩まないで、聞いてくれる先生に相談して下さい。職場が忙しくて話がしにくかったら学習会に参加してみてください。先輩の実践報告や講演を聞いて自分もやってみようと、活力が湧いてくるかもしれません。笑顔で生き生きとした先生の姿は、子ども達にとっても元気の源になることでしょう。

子ども達に自信を持って語れるよう学んでいきませんか？もちろん私も一緒に。

栄養士のみなさんへ

名前を覚えた子は？

草加市立西町小学校栄養教諭 今井 ゆかり

栄養士のみなさん、職場に行くのは慣れてきたと思います。

調理師さん以外の人と話していますか？

調理師さんと冗談が言えるようになりましたか？

仕事のことを教えてくれる栄養士の先輩がいますか？

児童生徒のなかに名前を覚えた子はいますか？

子どもたちに名前を覚えてもらえましたか？

一つでも「はい」以外の答えがあったら努力してそれができるようにがんばりましょう。

栄養士は、センター以外のところは、同じ職場で一人きりですよね。学校の先生は忙しいので、職種の違う栄養士には声をかけてくれないこともあります。誰

でもいいので、こちらから「雨ばかりでいやですね。」なんてことでもいいんです、話しかけましょう。

調理師さんとは、いろいろなことを相談しましょう。栄養士は指示を出す立場ですが、上司ではありません。だけど、栄養士の思いを実現してくれる人たちです。これから作っていく給食をよいものにするために、時間があれば調理師さんと話をしましょう。いっぱい話をして、お互いがどんなひとなのかわかりあってください。

同じ職場に仕事のことを聞ける栄養士の先輩がいない場合は、よく知らない人でもいいので電話をかけて質問してしましましょう。栄養士はみんな通つてきた道なので、だれでも教えてくれるはずですよ。いろいろな人に質問しましょう。その中で一番好きだと思ったひとにどんな

ん質問をでもいいですよ。

学校にいる人はもちろん、センターに勤務している人も学校に行つて子ども顔と名前を覚えましょう。だれが食べているか知っていると、おいしく作ろうという気持ちが強くなります。調理師さんが、そんなことはできないといつてきたときも○○さんの顔が浮かぶと、「いえ、お願いします」といえますからね。

子どもたちに自分のことも覚えてもらいましょう。食べるほうも誰が作っているか知っているほうが安心して食べられます。残すことにも少しは歯止めになります。

がんばれば、がんばっただけちゃんと結果が出る仕事ですよ、給食を作るのは。

「学校の事務職員」として

越谷市立西方小学校事務職員 田中 真記子

この春から新しく学校事務職員として働き始めた皆様、初めまして。まだ数ヶ月の勤務では慣れない事が多く、目の前の事務処理をこなすのが精一杯ではないでしょうか？学校事務職員は、基本的には各校に一人しかおらず、特に事前研修などもなく、突然仕事が始まる心細さは私もよく覚えています。

仕事、特に事務处理的な事は慣れればできるようになるものですが、一人職の怖いところは「本当に私の仕事のしかたは正しいのか？」「もつと良いやり方はないのか？」という不安でしょう。最近では教育事務所がいろいろな権限を学校（校長）におろして来て、責任も大きくなりました。（前は扶養・児童・住居手当の認定は、事務所が権限を持っていました。大分前は通勤手当まで事務所の認定で、学校で書類を揃えて提出すれば、記入や添付書類の抜けや間違いをチェックしてくれていました。県費事務システ

ムも一昨年までではなく、給与報告は毎月事務所に提出してその場で確認してもらうので、常に複数の目で見る事ができました。）また、学校配分予算を担当している地域も多いと思います。子どもたちの学校生活が充実したものになるよう、学習環境の整備をするというのはとてもやりがいがある仕事です。事務職員のやり方次第で学校のありようまで変わってくるうえ、方法や関わり方に正解がないため、こちらにも不安が多いのではないのでしょうか。

そんな不安や心配を解消する方法は一つしかありません。ズバリ、他の事務職員の仲間とできるだけ多く交流することです。常に情報のアンテナを広げ、仲間の実践を参考に勉強していくことしかないと思います。

私も、事務同士が集まるときには仕事のあれこれを聞いたり、組合や研究会の学習会などにも参加して、いろいろな事

を学ぶようにしています。勉強という大変なような気がするかもしれませんが、良い実践を知ったら、自分なりに取り入れてやってみるということです。見よう見まね、できそうな所だけ参考にするので充分です。その積み重ねが成長になるのだと思っています。

皆さんは、まだ目の前の仕事に追われて、勉強するのは後で！今は余裕がない！と思うかもしれませんが、はじめは他校の実情や実践を知るだけでとても有意義です。先輩や同期とお互いに話をするだけで、一人でやっているより、余裕や意欲がでてきます。

子ども達のために、職場の仲間と共同して、学校をどうより良くしていけるか。「学校」という場所にいる事務職を選んだ者同士として、仲間と共に歩んでいきましよう！

汲むヒト

花の森こども園代表 葭田 あき子

採用試験に受かった日から、先生と呼ばれ、自他ともに権威と聖人君主のライセンスを得たような暗示をかけられていないだろうか。

半世紀近い昔。私は幼稚園でトイレに下駄を落とした事を意を決して先生に伝え、スカートをはいた上品な先生は「それは困ったでしょう。よく正直に言えました。」と私の気持ちを解ってくれた。

中学生の私がクラスのこと、困っていた時、「授業が勝負」が決まり文句の担任は「君は、建設的に考えられるところがいい。」

と私の置かれている状況を解っていてくれた。

焼き物の師が「姉さんは、いろんなことを考えながらロクロを挽いている。」とマッコリを飲みながら言った。弟子である私はこどもの迎えや夕飯の支度を用立てられるので、先々を考えて集中でき

ていない私の課題をビシヤリと指摘した。

どの先生も今は、もうこの世におられない。そしてどの先生も何も具体的には教えていない。しかし、どの先生にも共通しているのは知識や技術は、よどみに浮かぶうたかたのごとく。まずはそれに勝る人間臭さが絶妙に私を惹きつけた。そうすると、幼稚園が好きになり、英語が好きになり、ロクロの渦に呼吸を合わせることを見つけられるようになる。血肉となって今の私を創ってくださった忘れたくない恩師である。

さてさて保護者になって学校から刺激を受けることは多い。

私は「指導」という言葉を聞くと恥ずかしい。息子は、テスト問題の「○○しなさい。」という言い回しが気に入らない。へそのまがった親子である。この違和感はどこからくるのだろ。

息子の高校の体育祭で各学年の優勝

チームが校長先生から表彰される際、三年生が肩車して待機していた。すると、二年生も一年生も大きいのが一人ずつでてきて、ひよいひよいと肩車をしたので。そうすると、なんと朝礼台の校長先生と同じ目線で賞状を受け取れるのである。「そうだ。がんばったのは、生徒なんだ」翌年、校長先生は朝礼台から降りて生徒と同じ目線で表彰してくださり、私は生徒の行動を汲んだ教師陣の判断に敬服した。

今の政治が国民を見ようとしないうちに、権威や聖人君主が先立つと確認の教育様式となり、こどもを汲む目をくもらせる。

ヘアーインディアンには、「教わる」という言葉がない。ナイフの削り方も網の編み方も自分で「学んだ」ことに誇りをもっている。

ひとりのこどもをホリスティックに汲めるヒトが、一滴のエッセンスを落とすと、こどもはゆつくりと化学反応を起こすのだ。どうか長い時間をかけて、じっくりと汲むヒトに成ってください。それが本物の先生だと私は思います。

毎日を楽しもう

新任教員の声

社会人として、そして、特別支援学校の教師になって早3か月が経とうとしています。3月に大学を卒業し、4月から特別支援学校で過ごしてきた日々は、正直、不安で

いっぱいでしたし、辛いと思うことのほうが多かったです。子どもとの接し方、授業の準備・実施、事務処理、初任者研修……。やるべきことが

山ほどあつて余裕のない毎日です。「この仕事むいてないな」と思ったことも、先輩の先生からのアドバイスに対しても「私にはできないよ、難しいよ」と思ってしまうこともありました。それでも、同じ初任者の先生や多くの先生たちに支えられていることを日々感じているし、何よりも子どもたちが笑顔を見せてくれることが心の支えとなっています。どんなに落ち込んでいても、朝、元気に「おはよう！」と笑顔で言ってくれたり、ニコニコしながらバスから降りてきてくれ

たりすると、今日も頑張ろうと思えます。教師として子どもたちに知識や技能を身につけさせることはもちろんですが、学校や学級が安心できて楽しい場であると思えるようにすることが教師の大事な役割であると考えます。目の前にいる子どもたちが「先生といると楽しいな」と思えるような教師になりたい。そのために、自分自身もまた、教師としての毎日を楽しもうと思います。

子どもと共に歩みながら

不安を抱えて歩み出した4月からあつという間に時は流れました。日々の雑務に追われ、学級づくりや教材研究の時間を取れない現実には歯痒さを感じています。これまで何とか過ごせたのは、子どもや保護者、先輩の先生方に支えられ、新たな出会いに素晴らしさを見出せたからです。

「子どもたちはランドセルに『見えない学級通信』も家に届けているから大丈夫よ!」多忙で追い詰められていた私に

大学時代の恩師はこんな励ましの言葉をかけてくれました。肩の荷が軽くなった気がしました。子どもが「先生!昨日こんなことがあったよ」と私に話すように、学校での様々な出来事や思いを家庭に届けているのかもしれない。

自分にゆとりがないと、「教師はこうしなければならぬ」と学校や初任研で強く言われると鶴呑みにしそうになることがあります。本当に子どもの思いや願いに応えることなのかを教師が考える必要があるはずです。私は、子どもと共に学びながら希望を紡ぎだすことが教師の醍醐味であると考えています。日々、子どもと創り出すドラマこそ希望の光です。ドラマに感動する熱い心、物事を分析する冷たい頭。様々な人たちから刺激を受け、未来に向かって子どもたちと歩んでいきます。